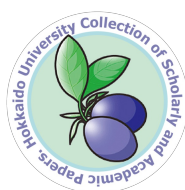




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パートナーシップの未来に向けて：リーアン・アイスラーの文化変容理論に関する考察
Author(s)	周, 靖而
Citation	北大宗教学年報, 3・4合併号, 2-13
Issue Date	2023-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/106336
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88694
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_4_01_p2-13.pdf



【研究ノート】

パートナーシップの未来に向けて

—リーアン・アイスラーの文化変容理論に関する考察

周 婧而

I. 女性の霊性運動とリーアン・アイスラー

リーアン・アイスラー (Riane Eisler) の『聖杯と剣 (The Chalice and The Blade)』は、1987年の初版発行から既に36年に経ったが、アイスラーに関する系統的な研究、とくに宗教の視点からの評価は、まだ十分にはなされていない。その原因は、彼女自身に宗教学者の自覚がなく、また、代表作の『聖杯と剣』が学術研究書というより一般的な読者に向けられたベストセラーと思われているからかもしれない。以上の理由から、アイスラーの理論が、宗教学的には過小評価されているのではないかと筆者は考える。

2011年11月時点で、『聖杯と剣』は全世界での発行部数は50万部を超え、中国語・日本語・ロシア語など26種の言語で訳されている。特にアメリカでは熱狂的に読まれており、現在57刷の発行となっている。アイスラーの文化変容理論は学術界から多くの批判を受けた一方、彼女の著作は一般の読者の心を動かし、大ヒット作になった。それに伴い、『聖杯と剣』は女神崇拝・女性霊性に関する理論を世界中に広く伝えており、女性の霊性的解放を喚起することを働きかける功績があるといっても過言ではない。

女性の霊性運動 (feminist spirituality movement) とは、1970年代の北米・ヨーロッパ・オーストラリアにおいて、第二波フェミニズムの影響で興隆した女性の精神・霊的な解放を目指す運動を指している。統一的な教義・綱領がないが、基本的には古代で女神崇拝文明の存在を認めた上で、伝統のキリスト教を批判しながら女神崇拝と女性霊性の再帰を掲げる立場を示している。

前期のアイスラーは、『聖杯と剣』と『聖なる快樂』において、人類史をジェンダーの視点で再構築し、人類の歴史がパートナーシップ (partnership) とドミネーター (dominator) と呼ばれる二つのシステムの「周期的な葛藤」 (periodic struggle) の中でダイナミックに進んでいるという文化変容理論を打ち出した (Eisler, 1987, p.137)。その理論は学界からの非難を浴びたが、一般人の女性読者に自分の持っている力を意識させ、大衆にフェミニズム・スピリチュアリティの概念を普及してきた役割は否定できない。女性の霊性運動に関わる学者・運動家の中で、アイスラーのように人気を博した人は少数である。常にフェミニズム・女性霊性運動の道標のようなテキストと思われる『女性霊性の台頭：宗教における

フェミニズム読本(Womanspirit Rising: A Feminist Reader in Religion)』（Carol P. Christ、Judith Plaskow、1992）は、今日でも英語版しか存在しない。女性霊性運動の理論的基盤を作ったマリヤ・ギンブタスの著作はいくつかの訳本が見られるが、その影響力は学術界限定される。しかし、アイスラーの初期の著作において、彼女はギンブタを含む女神崇拜と女性の霊性運動に関わる他の多くの学者を引用した。彼女の平明で感情の込めた言葉は、一般の読者にとって他の晦渋な専門性高い学術書より受け入れやすい。言い換えれば、アイスラーの著作は、ギンブタをはじめ一連の女性霊性運動者・女神崇拜研究者の学説をアメリカ・ヨーロッパ以外の国々に伝える仲介的な役割を果たしていた、といっても過言ではない。

『聖杯と剣』の公表から既に36年に経ったが、現在でも多くの女性読者がこの本を通じて初めて自分の霊性・パワーを意識したことは、ネットで投稿された読者レビューに散見されている。

他方、アイスラーは文化変容理論の土台に乗って歴史と宗教研究を超えて教育、社会、経済など幅広い領域で独自の理論と実践の体系を創出した。1987年、アイスラーは「パートナーシップ・システム・センター」という組織を創立し、現在に至るまで様々な領域で積極的に活動を行っている。後期のアイスラーは女神崇拜の歴史学的な議論についてもはや重点的に論じることをしなくなった一方で、女性の霊性は依然として「パートナーシップな未来」を実現するため不可欠な一環とされている。従来の制度的宗教を非難し、女性の身体を再聖化し、新しい宗教のあり方を探すなどの取り組みからみれば、アイスラーの「パートナーイズム運動」は、女性の霊性運動の枠組みにおいて位置付けられることが可能である。

2. アイスラーの人生と研究経歴

アイスラーは多くの著作や講演で、水晶の夜が彼女の人生のはじめのターニングポイントであったと言及した。1931年にウィーンで生まれ、六歳までにアイスラーは裕福なユダヤ人の家に幸せな生活を送っていたが、1938年11月10日、「水晶の夜」が起こった。ナチスの暴力と恐怖と同時に幼いアイスラーの印象に深く残ったのは、勇敢にナチスと交渉して父親を救った母親の姿である。その後、家族はヴェインから離れ、避難所を探していたが、アイスラーの夫であるデイビット・ロイの自伝によると、当時、ヨーロッパのユダヤ人が避難できる港はキューバのハバナと中国の上海しかなかった（Loye、2007、p.51）。

これを考えてください。もしあなたがユダヤ人で、この地球上で避難できるところが二つしかないことを気づいたとしたら、どう思いますか？ 激しい憎しみや無関心が蔓延しなかった場所は2つだけです（Loye、2007、p.51）。

アイスラーと家族がキューバへ逃亡したとき、彼らのほとんど全部の財産は失われてし

まった。スラム街で困窮な生活を暮らしていたと同時に、アイスラーはキューバの経済格差と女性差別に深く感じてきた。そして、このような動乱・貧困の子供時代には、彼女に暴力・性別・階層についての問題を考え始めさせた。なぜ人間は殺し合うのか？なぜこの世界には、一部の男性によるほかの人への抑圧に満ちているのか？女性は本質的に男性より劣っているのか？(Eisler, 1987, xiii)

十四歳のとき、アイスラーはアメリカに移り住み、ようやく安定した生活を得た。そして、カリフォルニア大学のロサンゼルス校で社会学と人類学の学士号を取得し、引き続き法学の課程の途中で、彼女は結婚のため退学した。不幸な婚姻と家庭は彼女に苦痛を与え、最終的には離婚に至った。1960年代、彼女は大学に戻り、法学の博士号を取得し、第二波フェミニズムに身を投じた。彼女は主に家庭法を専攻し、離婚案件の女性や子どもの権利のために働いた。また、カリフォルニア州の立法府が女性と子どもの権利を促進する法律を可決するように努力した。彼女はアメリカで最初の女性センターの一つであるロサンゼルス女性センターの設立者の一人となり、アメリカ最初の女性法律センターであるL.A.女性法律センターを設立し、UCLA女性研究科の設立を促進した(Loye, 2007, pp.54-56)。この時期の著書には、1977年の『解体：無過失離婚・婚姻・女性の未来(Dissolution: No-Fault Divorce, Marriage, and the Future of Women)』と1979年の『平等な権力ハンドブック：あなたの生活・権利・未来にとって平等権利修正案は何を意味するのか(The Equal Rights Handbook: What ERA Means to Your Life, Your Rights, and the Future)』が挙げられる。

彼女が今の夫デヴィッド・ロイと結婚するのは1979年である。ロイはアメリカ出身の進化システム科学者で、事業と精神の両方においてアイスラーの大きな支えとなった。彼はパートナーシップ研究センターの創始者のひとりであり、また、アイスラーと『パートナーシップの道：家庭と世界を癒し、生活と学習の新しいツール(The Partnership Way: New Tools for Living and Learning, Healing Our Families, and Our World)』を合著した。以上に言及したアイスラーの経歴は、主にアイスラーの夫デヴィッド・ロイの自伝『三千年の愛(3000 Years of Love)』から整理されたものである。

1987年、『聖杯と剣』が世に出た。これ以前には、アイスラーは親の亡くした悲しみと病気に苦しんでおり、このままではいけないと意識した後、生活状態を整えた上で、これからの人生をやり直したいと考えた。法律上の変革は足りず、文化の変革もしなければならない、と彼女は気付いた(Eisler, 2002, p.xi-xii)。どのような文化の形態に変革するのが正しいのだろうか？この問題を解決するため、彼女は法律の実践をやめて、学際的・異文化的なアプローチを用いた人類史の研究に転換した。その結果、「文化変容」という理論で人類史を解釈し、ドミネーション形態の制度が暴力の根源であると考え始めた。この理論について、次

章から詳しく説明を行う。

3. 文化変容理論（Cultural transformation theory）の定義と関連概念

①「パートナーシップ」と「ドミネーター」型

アイスラーによれば、人類の関係の最も基本的な 2 つの様式は、それぞれ文化的シンボルと価値観として「聖杯」と「剣」で表すことができる。剣は、暴力・恐怖・破壊の力に基づく「ドミネーター型」を象徴し、聖杯は生命を与え、愛を特徴とする力に基づく「パートナーシップ型」を象徴する。ドミネーター型の社会は、男性中心主義的な社会であるが、パートナーシップ型の社会は、女性主導的である一方、男女平等的な社会である。パートナーシップ型からドミネーター型への切り替えは、人類歴史上における画期的な「文化変容」となっている。

さらに、アイスラーはギリシア神話・シュメール神話・キリスト教などを例にとって、この文化変容の過程とメカニズムを詳しく展開した。ここでは、キリスト教の例を引用して説明する。キリスト教はもともと「愛」を標榜する宗教であり、イエスが宣伝する「敵を愛なさい」「隣人を愛なさい」は、まさにパートナーシップ形態の人間関係といえる。しかし、現在のキリスト崇拝の象徴は、イエスの受刑、肉体に対する虐め・苦難に対する賛美などである。例えば、13 世紀のイタリアで、鞭打ち苦行という、反省・改悔のため自らの身体を鞭打つ運動が現れた。君主統治のツールとしてのキリスト教は、すでにドミネーション形態に転換したからである。さらに、マグダラのマリアは、もともとはイエスの死後の女性指導者であったが、教会内部のヒエラルキーに反対したゆえに、歴史から消されて娼婦と汚名を着せられてしまった。つまり、アイスラーによれば、ドミネーター型の社会におけるキリスト教は、もはや愛を広める宗教ではなく、男性ドミネーターの抑圧・略奪・虐殺を広める宗教といっても過言ではない。

②ジラニー社会（gylany）

アイスラーは、ドミネーター型の社会組織が定着する前に存在していたパートナーシップ形態の社会組織を主として、平等主義的な社会を表すためにジラニー（gylany）という用語を作り出した。「gy」はギリシャ語の「gyne」の略で、女性を意味する。「an」はギリシャ語の「andrós」の略で、男性を意味する。真ん中の「l」はギリシャ語の動詞「lyos」のイニシアルで、英語の「linking」を表している（馬、2008、）。この用語は、どちらか一方がもう片方を支配するのではなく、両性を結びつけて融解する社会制度としての女男結合性制度を指す。この用語が最初に登場するのは、1981 年に発表された論文『ジラニー：平等的な

未来』である。

アイスラーによれば、ドミネーター型の社会に侵略された以前の古ヨーロッパは、女神を崇拝する世界であった。ここでの古ヨーロッパの地域とは、おもに現在のヨーロッパの東南部である。紀元前5000年以前の新石器時代の古ヨーロッパにおいて、芸術の中心は女性の彫像やシンボルであり、女神を祀る神社がどこにでも見られていた。さらに、新石器時代の芸術においては残酷・暴力を表す偶像が少ない。当時の人々の視点から見ると、芸術と生活の本来の目的は土地を耕し、必要な物質と精神的な資源を提供して、生活を満足させることであった。さらに、この時期には、神聖家族の家長は女性であったが、その女神は今の世界を統治する「神」の女性バージョンではない。女神の腕には、母の責任・保護・愛を象徴する聖杯が捧げられていた。

③クルガン仮説

では、私たちの文明は、具体的にどのようにジラニー社会からドミネーター型社会に切り替えたのだろうか。ギンブタスはアイスラーと同じくカリフォルニア大学ロサンゼルス校で教鞭を執ったことがあるが、資料不十分のため、現時点の調査では、二人が知り合いであったか否かに関する確かな証拠はない。ただし、アイスラーは他の女性の霊性運動家と同じく、ギンブタスに提出された「クルガン仮説」を認めたことは明確である。この仮説によれば、今のロシア・ウクライナ南部にかつて「クルガン文化」が存在した。前述の古ヨーロッパ文化と比較すると、クルガン文化の経済形式は遊牧で、居住環境が半地下式家屋の小さな村落で、丘上から支配する族長もあり、社会制度が家父長制、好戦的なイデオロギーを持っており、男性創造主を崇拝するなどが特徴として挙げられる（Eisler, 1987, p.261）。

しかし、紀元前5千年から紀元前3千年にかけて、クルガン族が幾度もの大規模な侵略によってヨーロッパの平和的な母系社会を完全に破壊した。クルガン族侵略の四段階につれて、彼らの社会制度もヨーロッパの北部から東南部までどんどん拡大した。「今や、あらゆるところにおいて巨大な破壊力を持つ男たち——肉体的に最も強く、最も鈍感で、最も残忍な男たちが頂点に立っていた。社会構造は、階層的かつ権威主義的になった。集団として男性より体が弱く、生命を与え維持することを象徴する昔の力の概念と最も一致する女性たちは、次第にそのあとやむを得ず位置づけられる地位、つまり男性管理の生産と再生産の技術の道具へ退いた。」（Eisler, 1987, p.53）そして、社会システムは混乱状態に陥り、新しい秩序として、クルガン族によってもたらされた家父長制の社会システムが確立された。男神が女神に取って代わり、剣が聖杯に取って代わり、男性のヒエラルキー統治が女性と男性のパートナーシップ形態の人間関係に取って代わることで、社会全体における文化

的変革が完成した。

④聖なるものとしての性

1995 年に出版された『聖なる快楽』で、アイスラーは文化変容理論をセクシュアリティの分野により広く展開させた。彼女によれば、最初のジラニー社会において女性とセクシュアリティは力の源泉であり、謎に満ちた再生や春などのイメージと関連している。先史時代の祖先たちが女性の体には神秘的な力があると考えられており、月の周期に伴う出血現象、子供を産む能力、生命を育む乳汁を分泌することなどはその証拠である。他方、生殖の力だけではなく、女性の体の性快楽を激発できる力も崇拝の対象となった。性的快楽は宗教的感情と似ているとされており、性行為は決して穢れや罪などではなく、神聖な宗教感情を激発させる、神秘的な霊と肉を結合させる宗教儀式であったとみなされていた。

しかしながら、ドミネーター形社会モデルの確立につれて、男神は女神の力と地位を奪い、セクシュアリティは汚名を着せられ、女性は卑しい存在とされるようになった。しかしながら、ドミネーター形社会モデルの確立につれて、男神は女神の力と地位を奪い、セクシュアリティは汚名を着せられた。本来快楽・自然・神聖とつながった性は、暴力と支配的意味を帯びたと同時に、女性の肉体は男性の靈魂に害を及ぼすことができるとされてきた。つまり、聖と性、霊と肉の分立が始まった。これはパートナーシップのモデルを中心とした社会に代わり、ドミネーター者型の社会が主流になった結果であり、レイプ・家庭内暴力などの今の時代でもよくみられる女性に対する暴行も、性を支配手段とされるイデオロギーの産物といえる。

4. パートナーシップの力と霊性の実践

ユダヤ家庭出身のアイスラーは、二次世界大戦が終わった後、信仰を失った時期が存在する。両親のために依然としてユダヤ教徒の生活を暮らしたが、彼女は神の存在と宗教に問い続けた。どうして神がこのような酷いことを許すのだろうか？

宗教史を研究した数年後、彼女は再び「霊性」という言葉を使い始めた。特定の神につながらない霊性は、抽象的ではなくて行動的で、神秘的ではなくて日常的な概念である。従来のドミネーターのモデルを主導とする制度的宗教は、日々の生活から遊離しており、弱者層・婦女・児童の苦難を冷淡な目で見ており、さらに苦痛・不幸・残虐を合理化した。修道院で修行したり、日曜日に教会に行ったり、山上で一日中瞑想をしたりすることは、人々を日常生活と現実社会から抽象化し、周りで起きている事件から距離を置き、他人の苦しみから遠ざける。

アイスラーによれば、これは愛と思いやりを核心とする世界諸宗教の本来の姿ではない。人を痛めつけるのも宗教そのものではなく、抑圧と従順を強調するドミネーター型の教会制度こそが苦痛の根源である。では、パートナーシップ形態の社会、宗教の本来の姿に戻すため、私たちは何をすべきか？アイスラーは、パートナーシップな霊性、言い換えれば人の同情心・責任感を喚起することが大切であると指摘した。また、それは口だけの言葉にとどまっているのではなく、この霊性を私たちの生活に取り入れるべきである。つまり、パートナーシップな霊性に従いながら、種族・女性・児童・環境・階層など現実的な議題に注目し、経済・教育・法律・宗教など様々な分野で具体的な措置を行うことである。さらに個人のレベルでは、他人をケアして弱者に同情心を持ち、ボランティア活動に参加し、男性が家庭生活へ回帰するなど、パートナーシップな霊性を日常生活に具体的に実践することである。ちなみに、そこでアイスラーがとくに指摘したのは、同情心・慈愛などの特質は伝統的に「女性らしさ」の道德であって、未来社会で女性の役割が非常に重要であるということである。各種の役職に占める女性の割合を高くし、女性の活躍を推進するのは、理想な社会を創造するため不可欠なことである。

2003年に出版された『パートナーシップの力：人生を変えられる三つの人間関係』において、アイスラーはどのようにパートナーシップの霊性を働かせるかについて、具体的な行動のチェックリストを作成した。それは三つのステップで構成されており、合計18項目からなる。以下では、この三つのステップを要約的に説明する。

(一)：毎日五分ぐらい瞑想する。瞑想の内容は、過去の霊性体験・身体感覚・宇宙のエネルギーや、従来の道德と教えを再分類、女性のイエスを想像、神の概念を拡大、エロティックと神聖の統合に関する想像なども含まれている。

(二)：霊性の練習は内的なことだけではなく、正義のために声を上げる勇気を探さなければならない。宗教伝統におけるドミネーター型のストーリーと教義に挑戦する。

(三)：さらに一歩を進めると、自分の所属の宗教団体に研究グループを組んでみて、これまで受けてもらった教えはどのようなイデオロギーを伝えているのかを考える。そのうえで、所属宗派がパートナーシップの支持活動、女性・児童に対する暴力に反対する運動に参加するように促す。(Eisler, 2002, pp.200-202)

以上の三つのステップは、パートナーシップの霊性の働きの範囲を内在から外界へ次第に拡大するステップである。つまり、第一歩は内的な心の働き、次は身近の不正を発見、最後は周りの人を動員するという流れである。「内面を見つめるだけでは足りない。外に目を向けることは同じく大切である(Eisler, 2002, pp.198)」。現世否定・唯一絶対の存在者・死後世界を強調する宗教を否定し、現世の幸福を求めて日常生活と分断しない霊性を提唱

するのは、アイスラーの実践に見られる宗教的立場である。

5. アイスラーの教育活動における霊性の役割

本章では、アイスラーがどのように教育活動にパートナーシップ霊性を喚起する、また、教育における霊性の位置づけについて説明を行う。

パートナーシップ・システム・センター（以下は「CPS」と略称する）は、1987年に『聖杯と剣』の読者たちの要求に応じて成立された組織である。アイスラーは創始者であって最高責任者でもある。CPSのホームページには、パートナーシップ・学習センターという項目がある。その中に、様々なオンラインのコースが提供されている。下記では、それらのコースの名前と内容を整理する。

タイプ	コース名
オンラインコース	われらのストーリー、われらの生活を変える ケアー経済学の紹介 パートナーシップの世界を築く
オンデマンド・ウェブセミナー	女性がどのように公正でケアリングの世界を導くのか トラウマセンシティブ・スクール：教育・社会におけるパートナーシップへの転換 トラウマセンシティブ・スクール：コロナへの対応 思いやりのある男性を育てる AI4 Good 世界サミット リーアン・アイスラーのキーノート SheEO サミット 202:われらの制度を人間化する アイスラーとのスペイン語のインタビュー リーアン・アイスラーと Women 4 Solutions ウェブセミナー

メリディアン大学の課程は、アイスラーと社会学者・心理学者・未来学者のアタブ・オメル（Aftab Omer）によって開設されている。コースの構成は以下のようになる。

第1週	ケアー・意識とパートナーシップ能力	○パートナーシップドミネーターの社会階層 ○パートナーシップド意識の5つの次元
第2週	関係性：ケアの基礎	○家族・ジェンダー・親密さ ○女性らしさと男性らしさを再構築する

		○相互信頼・互惠の習慣 ○公平と相互責任の倫理規範
第3週	快楽：肯定の活力とつながり	○帰属感と幸福感 ○遊び・学び・楽しみ ○美しさと自然のつながり ○セクシュアリティの神聖化
第4週	繁栄：ケアの経済学	○真の価値を判断する ○政策・実践・職業の転換 ○生産力と人手不足
第5週	創造力：人類繁栄のための芸術と技術	○文化的相乗効果の再現 ○芸術と公共の再生 ○想像力と文化の指導力
第6週	スピリチュアリティ：文化の再生の源泉	○労働の目的と意義 ○つながりと思いやりの儀式化
第7週	もう一つの世界の可能性	○未来の存在 ○全体的なシステムと世界を創造

現時点で、それらのコースの授業内容についてまだ詳しく調べていないが、以上の授業概要を見ればアイスラーが教育活動においてどのように霊性を強調しているかがわかる。例えば、第六週の授業では、霊性の力が強調され、宗教的性質が明らかにみられる。また、第三週の授業では、身体・性の神聖さが言及されている。また、ウディネの大学の課程構成では、第一項目の宗教と臨床心理学の授業は60時間が必要であり、主に、パートナーシップのパラダイムとシャーマニズムの経験における心理学的モデルを教えている。ほかの項目も、シャーマニズムとパートナーシップの結合、実践を重要な部分とする。担当教授の専門を見ると、シャーマニズム研究者とパートナーシップ研究者に加え、女神研究、インド学、人類学、神話学、儀礼学などの学者も名を連ねている。

オンライン活動の他に、アイスラーは積極的に様々なスピーチを発表し、セミナーに参加し、パートナーシップの理論を何度も繰り返した。その中で、女性、女神、霊性は頻繁に提起されたキーワードである。

そもそも、アイスラーが唱える宗教のモデルは、従来の制度的宗教のモデルではなく、また日常生活から遊離する儀式化されたものではなく、私たちの生活にある「思いやり」「ケア」である。彼女の主張によると、神聖と世俗は統一的なものであるゆえ、彼女の社会・

教育活動を単純的に「世俗的」あるいは「宗教的」と定義し、あるいは両方の性格も帯びるという考え方は、どちらも適切とはいえない。霊性と世俗を融合させ、一つのものとして取り扱い、そのうえで人々の精神かつ身体の快樂を求めるために役を立てるのはがポイントである。

6. 結び

前述のように、学界におけるアイスラーへの批判は少なくない。その中にはとくに実証主義的な非難が多い。例えば、リリアン・S・ロビンソンは、アイスラーの推論が飛躍すぎると指摘した。精神上的の価値観が社会制度を決定したことは当然であると断定した一方、考古学の資料も十分とは言えない。また、エリザベス時代のイギリスを論じる際に、無批判的に史料を引用したから、事実の間違いを犯した（Robinson、1990、pp.383-384）。実は、考古学から猛烈な批判を受けたのはアイスラーだけではなく、マリア・ギンブタスのクルガン仮説は最大な批判のターゲットである。証拠不足、推論が自由すぎるといった攻撃が散見されているに加え、ギンブタスの理論が母権制をサポートすると誤解した。例も珍しくない。ギンブタスの学術成果が貶されるにつれて、女神崇拜の文明がかつて存在したという女性霊性運動の基盤が強く動揺させられた。

それらの批判に対して、マルグリート・リゴリオーズは、これはまさしく「アンドロセントリックな偏見（Rigoglioso、2007、p.100）」であると非難した。「重要なのは、チャタルヒュウク人が聖なる女性の姿を認める可能性を排除することは、正統な宗教的構成を拒否するということである（Rigoglioso、2007、p.100）。」

さらに、女性霊性運動がクルガン仮説を土台としているが、最も重要なのはその理論が考古学・歴史学的に実証できるかどうかではなく、その運動が抑圧された女性に精神的な解放をもたらすというエンパワーメントの側面である。アイスラーの理論をこの視点から評価する必要があるだろう。最も価値があるのは歴史学の成果ではなく、精神の救済・自分の身体との和解の部分である。

また、1996年のインタビューで、アイスラーは自分の読者の半分以上が男性であると言及した。一部の男性読者が「この本に癒された」といった感想を述べたことがある（Eisler、1996）。男性中心的支配形態社会の反面は、女性中心的ではない（あえて言えば「女性らしさ」の道徳を中心とする社会）ことは、アイスラーがずっと強調している点である。抑圧された女性を解放させるというフェミニズムの立場は言うまでもなく、男性もフェミニストの仲間としてパートナーシップ形態社会の回帰のため努力することも可能とされている。女性差別と闘うことは男性と闘うことではない、人の本能である愛・同情を喚起するということである。家父長制に対する批判や非難にとどまらず、可能な代替案を探し、男性も支配形態社会の被害者ということを指摘し、男女の二項対立を緩和することができる。

しかしながら、すでに示したように、アイスラーは固有の性別役割・男女二元論を打ち破

ろうとするため、「男性」と「女性」の代わりに、「パートナーシップ」と「ドミネーション」・「聖杯」と「剣」といった用語を作り出した。ここで留意しなければならないのは、このような二分法的思考は、再び二元論の罠に落ち、既存のジェンダー規範を強固にする危険性が潜んでいることである。

アイスラーによれば、先史時代の文明においては、自然万物の提供者・造物主である女神に対する崇拝が流行っていた。そこにアイスラーの言う女神崇拝は、生殖崇拝を原点として、慈悲・母性・同情・豊穡といった他の特性が派生してきた、ということになる。説得力を高めるため、さらにメス中心社会のボノボの社会関係を挙げ、男女の生物学的な性差も提起した。こうすることで、生殖機能(母性・慈悲)＝女神＝女性中心社会＝女性のような一連の等式により、母性を女性の生まれつきの性質に還元してしまった。しかも、アイスラーはパートナーシップな霊性が性別に問わず誰の心の中にも潜んでいるものであることを強調したものの、ドミネーター型の制度が男性中心な社会に生まれたものも既存の事実である。なぜ社会が男性中心であったらドミネーター型の制度になるのだろうか、この問題を解明しない限り、「女神＝パートナーシップ」「男神＝ドミネーション」のような性別ステレオタイプの罠に落ちてしまうかもしれない。

参考文献

1. David Loye (2007) *3000 Years of Love*, Carmel: The Benjamin Franklin Press
2. Riane Eisler (1987) *The Chalice and The Blade: Our History, Our Future*, New York, HarperCollins Publishers リーアン・アイスラー, 野島秀(訳)(1991)『聖杯と剣：われらの歴史、われらの未来』東京：法政大学出版局
3. Riane Eisler (1987) *The Chalice and The Blade: Our History, Our Future*, New York, HarperCollins Publishers
4. Riane Eisler (1995) *Sacred Pleasure: Sex, Myth, and the Politics of the Body* リーアン・アイスラー, 浅野敏夫(訳)(1998)『聖なる快楽：性・神話・身体政治』東京：法政大学出版局
5. Riane Eisler (2003) *The Power of Partnership: Seven Relationships that Will Change Your Life*, California, New World Library
6. Riane Eisler (1981) Gylany: the balanced future. *Futures* 13(6):499-507.
7. Lillian S. Robinson (1990) Sometimes, Always, Never: Their Women's History and Ours. *New Literary History* 21(2):377-393.
8. Marguerite Rigoglioso (2007) The Disappearing of the Goddess and Gimbutas: A Critical Review of The Goddess and the Bull. *Journal of Archaeomythology* 3 (1), 95-105
9. 馬冬玲(2008.1), 「重建 gylany 社会——讀『神聖的歡愛』」『婦女研究論叢』84(1): 89-92
10. 「Partnership Learning Center」(Center for Partnership systems) <

パートナーシップの未来に向けて

ーリーアン・アイスラーの文化変容理論に関する考察（周婧而）

<https://www.learnpartnership.org/>>(2023 年 1 月 31 日アクセス)

11. 「Partnership Systems Concentration」(Meridian University) (ウェブサービス開始:1993 年 ~) < <https://meridianuniversity.edu/academics/concentrations/partnership-systems/>>(2023 年 1 月 31 日アクセス)

12. 「Reimagining Power and Revaluing Care:Actualizing the Potentials of Partnership Systems」(Meridian University) (ウェブサービス開始:1993 年 ~) < <https://meridianuniversity.edu/public-programs/online-courses/reimagining-power-and-valuing-care/>>(2023 年 1 月 31 日アクセス)

13. 「Master's Degree in Partnership Studies and Native Traditions」(University of Udine) < <https://www.uniud-it.translate.google.it/didattica/formazione-post-laurea/master/alta-formazione/Area-umanistica-comunicazione-formazione/partnership-sciamanesi> mo?_x_tr_sl=it&_x_tr_tl=en&_x_tr_hl=en&_x_tr_pto=sc>(2023 年 1 月 31 日アクセス)

14. Scott London (1996) 「Sex, Myth and Politics:An Interview with Riane Eisler」 <<https://scott.london/interviews/eisler.html>>(2023 年 1 月 31 日アクセス)